

みんなでおおさかを守ろう

商店街で安心して
買い物していただけるよう
感染症対策を進めています！

商店街は「地域の顔」

商店街は、高度経済成長期にその数と規模が大きくなり、町の中心に立地することも多いことから、「地域の顔」として存在してきました。買い物物の場であるだけではなく、お祭りなどのイベントを開催するなどして、街の活性化の担い手、コミュニティを形成する「場」としても地域に貢献してきました。

しかし、自動車が大量化することに伴い、郊外への巨大なショッピングセンターの出店が進み、近年では人口減少に加え、EC市場が拡大するなど、商店街はますます厳しい状況に置かれることとなります。

コロナ禍の商店街

厳しいなかにも、頑張ってきた商店街。しかし、これまでに経験したことのない大打撃を受けることとなってしまいます。それは、今なお続く、新型コロナウイルス感染症拡大による影響です。

先日、足が遠のいていた戎橋筋商店街に久しぶりに訪れた時のこと。何気なく上を向くと、初秋の少し高くなった空と流れる雲が見えました。アーケード屋根は閉まっています。

なごころしか 記憶



になく、少し驚きましたが、調べてみると、換気をよくするための感染症対策の一環であることがわかりました。

戎橋筋商店街をはじめ天神橋筋商店街、千林商店街、駒川商店街では「みんなで守ろう。おおさか」をスローガンに7月11〜12日に啓発イベントが実施されました。大阪府広報担当副知事の「もずやん」もかけつけ、配布されたうちわには、4つの「新しい生活様式」を分かりやすく表示。その他にも、商店街入口には消毒用アルコールが置かれ、各飲食店の店先には「やってまっせー感染症対策」と書かれた大阪府の感染防止宣言ステッカーが貼られています。さらには、商店街の路面と柱は定期的に消毒液で殺菌されているとのこと。少しでも安心してお客さんに来てもらおうという気持ちが伝わってきました。

キーワードは「バイローカル」

身近にあるよき商店を生活者が知り積極的に利用し、商いを育てることで、地域の価値と人々の生活の質を高める運動を意味する「バイローカル」という言葉。阿倍野でその活動にとりくむ有志チームの山本英夫さんは、「地域で重ねてきたお店と生活者の関係づくりの取り組みがコロナという緊急事態の中で力になった」と話します。

戎橋筋商店街振興組合理事長の菊地正吾さんは、「これからも変わらず、大阪の人に愛される商店街づくりをめざします」と話します。インバウンドや国内旅行者の回復が見込めない今、「バイローカル」は、かつての「街の活性化、コミュニティの担い手」としての商店街の姿を取り戻すキーワードと



言えるでしょう。

「大阪の台所」黒門市場では、感染症対策を強化し、7月と8月の6回にわたり地元で愛される市場をめざして「ワンコイン市」を開催。とらふぐのてっさ500円、ジャンボ大福100円など、参加店が赤字覚悟で商品を準備し、大盛況。黒門市場商店街振興組合事務長の國本晃生さんは「人通りを呼び戻すため、みんなで協力してがんばりたい」と意気込んでおられ、10月下旬にも開催を検討中とのことでした。

今や旅のトレンドは「近場」。最も身近な存在のひとつ「商店街」。今だからこそ、地元商店街に出かけてみませんか。

大阪府では、「3密」を回避する
感染症対策や需要喚起の支援を
モデルとなる商店街で進めています。



詳しくは大阪府商店街
感染症対策等支援事業
ウェブサイトで！

みんなでおおさか 検索

コロナ禍で生活様式が激変する中、身近な商店街の存在価値があらためて注目・評価されています。こういう時だからこそ、商店街は活性化のノウハウを有する人材・団体の力を借りて、地域住民に商店街の役割と魅力を発信すべきと考えています。大阪の多くの商店街で、市町村、大阪府や国などの施策も活用しながら、感染症対策と需要喚起を両立させる取り組みが広がることを期待しています。

この人に聞きました！

今こそ、商店街はその存在価値を示すべき



大阪商業大学総合経営学部
加藤 司 教授



みんなでおおさか 商店街行動宣言



大阪府商店街感染症対策等支援事業事務局

(受託事業者：大阪府商店街振興組合連合会・株式会社産経アドス共同企業体)

天神橋筋商店街